第二十八回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

パネルディスカッション

司会　それでは、質疑応答およびディスカッションを始めさせていただきます。これより、ディスカッション終了まで、司会を戸田上人にお渡しして、進めてまいりたいと存じます。

戸田上人、よろしくお願いいたします。

戸田　よろしくお願いいたします。まずは先生方、ご講演ありがとうございました。

フロアからご質問をいただいておりますので、一つずつお答えしていきたいと思います。発表順ということで、まずは私から参ります。二つほどご質問をいただいております。

まず一つ目。「中濃先生は学生時代、立正大学教授の加藤文輝上人に教えを受けていた。加藤上人は終戦のラジオ放送を聞いた翌日、宗門の戦争責任を取って自害なされているということが書かれている。上人の遺体を棺に納めたのは中濃先生であるということを聞いているが、中濃資料の中にその加藤文輝上人の遷化を巡って、その証言があったかどうか」というご質問でございます。ありがとうございます。

率直に結論を申し上げますと、現状、そういった資料は見当たりません。今回、データ入力作業をする際に、中濃先生の論文や記事、自著があった場合には、そのタイトルも含めて入力しております。そういったところには、加藤上人のご遷化に関するものは見つかりませんでしたので、恐らくないと思います。よろしいでしょうか。

続きまして、もう一つご質問をいただきました。ありがとうございます。

「今回整理した資料の中で、特に貴重なものや興味深いものがありましたら、具体的に教えてください」。これについては私からお答えさせていただきます。

貴重なもの、興味深い資料は非常に多くありまして、ほとんど全部と言っていいぐらいなのですが、一つ例を挙げるとしたら、中濃先生の自筆メモなどは、とくに興味深く拝見しておりました。大量にある雑誌や刊行物の中でも、ご自身のメモや関連資料が雑誌に挟まれているということがございまして、中濃先生がその当時、どういうことをお考えになって、どういうことに関心を持たれて、その資料を収集されていたかということが、非常に感じられる資料でございます。

また、もう少し全体的なお話しをしますと、中濃先生がこれだけ幅広く資料を集めていらっしゃったというその事実自体が興味深いところです。これは私が個人的に面白いと思ったところですが、中濃先生ご自身の著作に対する書評ですとか、あるいは批判といったものを、たくさんコピーしてお持ちになっていらっしゃいました。要するに、自分に対する反対意見も含めて、言われていることを全部収集されていたということは、中濃先生のご性格といいますか、内面を垣間見るようで、個人的に面白いなと思ったところでございます。以上でございます。

それでは引き続きまして、大谷先生へのご質問を読ませていただきます。「中濃師の平和運動は、当時、日蓮宗内ではどのように受け止められていたのでしょうか。また、宗教者の政治参加について、世論では、どのような評価だったのでしょうか」。質問者の方の氏名は記入されておりませんが、大谷先生にご質問いただいております。お願いいたします。

大谷　ご質問、どうもありがとうございました。

手元に資料がありますので、その資料をご紹介したいと思います。

昭和三十三年に、日蓮宗内で日蓮宗新聞社が実施したアンケート結果があります。『日蓮宗新聞』に載っているアンケート結果です。これは、昭和三十三年の十一月に実施されました。昭和三十年に原水禁第一回世界大会が行われて、昭和三十年に世界立正平和運動が立ち上がるのですが、その数年後に行われたアンケートです。

どのようなアンケートかというと、これは世界立正平和運動に関するアンケートです。全国の地方部長、宗務所長、宗会議員、立正平和委員など、百二十二名を対象として、回答数は、その半分の六十一ですので、数はそんなに多くないです。回答の内訳は、支部長、宗務所長が三十九名で、宗会議員の方が十七名、平和委員の方が五名で、幾つか回答が載っているのですが、そのうちの幾つかを紹介すると、まず、「世界立正平和運動が行っている平和運動の方向性について、どう思いますか」という質問に対しての回答として、「従来の原水禁運動中心に目標を絞ったほうがよい」と答えた方が、六十一名中、四十五名で非常に多い。「幅広い運動をやったほうがよい」と答えた方が十一名でそれほど多くない。

次に、「運動の効果について、どうお考えになりますか」ということに関して、「日本原水協をはじめ、平和の運動団体と同調・協力したほうがよい」と答えた方が二十六名。「独自の立場でやったほうがよい」という方が十四名。「他の宗教団体のみと協力したほうがよい」と答えた方が十九名で、これは分かれているのですね。要は、「原水協と一緒にやったほうがいい」、「独自の立場でやったほうがいい」、「宗教団体とのみ協力したほうがいい」という回答の割合は非常に拮抗して、それぞれ分かれたという結果が出ております。

更には、「地方での平和運動推進の問題点として、どのような問題がありますか」という質問が自由回答式になっていて、その幾つかの回答が紹介されているので、ご紹介すると、「管内で無関心で不一致である」、「宗務所長をは

じめ、指導者の熱意が乏しい」、「平和運動が労組や左翼文化人などに利用されている」、「最近の平和運動は幅が広くなっているので、ついていけない」、「平和運動が政治的に利用されている」、「平和運動と信仰の結び付きがない」と、非常に厳しい意見が見受けられます。厳しい意見だけを取り上げたわけではなくて、非常に厳しい意見が多かったということが分かるのです。

このような回答を踏まえて『日蓮宗新聞』がどのようなまとめをしているかというと――これは日蓮宗新聞の記者の方の見解なので、日蓮宗一般の見解というわけではないかと思いますが――「今後の立正平和運動は、従来のように他の団体機関と協力・提携するが、あくまでも宗教団体の立場を堅持し、特に他の宗教団体と密接な提携をして、不偏の立場で、従来の方法による地味な運動を展開することが望まれている」、つまり、「不偏中道の立場でやったほうがいいのではないか」という意見が挙がっていたということです。

ですから、平和運動そのものではないのですが、少なくとも立正平和運動に関しては、日蓮宗内で、そのような意見が出されていたということが分かります。この後、昭和三十年代後半から四十年代にかけて、立正平和運動は停滞していき、それを引き継ぐ形で立正平和の会が昭和四十四年に設立されるという流れかと、個人的には思います。

もう一つの、「宗教者の政治参加について世論は、どのような評価だったのでしょうか」という質問なのですが、すみません、これはデータがなくて、例えば一九五〇年代、六〇年代にどのように評価されていたのかということは、今の段階では分からないので、これは宿題とさせていただきたいです。

ただ、時代が下って、二〇〇八年、二〇一二年、二〇一六年に庭野平和財団が行った「宗教団体の社会貢献活動に関する調査」というものがあります。これは一般の方々を対象とした世論調査なのですが、最新の調査での「あなたは、宗教団体が行う活動として、どのような活動を期待しますか」という質問に対して一番多かった回答が、「平和活動」です。約三十七％を数えています。社会活動とか、福祉活動とか、教育活動ではなくて、「平和活動」だった

のです。ただ、これは裏を返すと、少し皮肉な言い方になりますが、あまり宗教者の社会貢献活動や社会活動が知られていないという現状があると思います。

例えば、立正大学のように宗門が教育機関を持つとか、おそらく、経営されている方もこの場におられるかと思いますが、福祉施設とか医療施設を「宗門がやっている」、「寺院がやっている」と認識を持っている方が、そんなに多くないのではないかという気がします。ですから、そういう宗門が行っている教育や医療、福祉等の活動の認識が十分で、そのような回答が出ているのかどうかということに関しては、割り引いて考える必要があるかとは思うのですが、そうは言っても、現在、一般の方々は宗教者に社会貢献活動として「平和活動」を望んでいる方が多いという結果があるということだけ、ご紹介をいたします。

戸田　ありがとうございました。では次に、坂井田先生へのご質問をいただいております。まず一つめ、「中濃先生と日中仏懇は文化大革命を批判し、中国仏教会との交流が断絶されましたが、宗懇は文化大革命を賛美して日中仏教の人的交流を進め、今日に至っています。宗懇は文化大革命をどう総括しているのでしょうか」。お願いいたします。

坂井田　ご質問ありがとうございます。

結論から申しますと、「総括していません」ということですね。ちょうど昨年、もう年が変りましたので二年前になるのですが、文化大革命が終わって四十周年ということで、中国史界隈では文革の評価をめぐる、いろいろなプロジェクトがありまして、いろいろな論文も出ました。そこで私も書かせていただいたのですが、その際、改めて当時の新聞や機関誌などを見ましたけれども、総括はされていません。

結局、国交回復を目指した日中友好運動は、分裂や対立をくり返して、影響力を持てず、国際政治の中の政府間の

都合で日中国交回復は実現してしまいました。宗懇はその後の中国政府の外交上の社交辞令をそのまま借用して、日中国交回復を「自分たちの成果である」、「決して交際関係の状況の変化であるとか、政治状況の変化ではない」といっています。日中友好協会（正統）の立場を、そのまま踏襲して今日に至っています。

戸田　よろしいでしょうか。ありがとうございます。続きましてもう一つ、坂井田先生にお答えいただきたいと思います。「本日、各先生が作られたレジュメを拝見いたしますと、中濃先生が様々な団体、会の理事、幹事、また事務局の仕事を担われたことが伺えます。また、大会などでの宣言、起草も行われております。このように、中濃先生の高い事務的なお仕事の能力（事務処理能力）を推察するのですが、資料整理の過程で、そのような点にお感じになられたことがありましたら、ご教示ください」。坂井田先生、お願いいたします。

坂井田　ご質問ありがとうございます。

事務処理能力の高さというのは、残された資料からおよそわかります。何年前でしたか、もう忘れてしまったのですけれども、最初に中濃先生のお寺の方に、お電話を差し上げたことがありまして、そのとき、中濃先生は亡くなっておられたので、恐らく、息子さんがお出になられたんだと思います。「中濃先生のお宅に非常にたくさん資料があるということを伺ったんで、ぜひ見せていただきたいんです」とお願いをさせていただいたときに、息子さんは「もう、あれは捨てましたから」とおっしゃたのですね。そのときは、それをそのまま信じて、諦めていたわけなのですが、大谷先生のご紹介がありまして、こちらで、たくさんの資料とめぐりあうことができました。段ボール三十箱ぐらいでしたでしょうか。

運動をしながら、同時に資料も整理していなければ無理な量が、およそファイルごとに、例えば、靖国問題だった

ら靖国関係のスクラップ、資料、会議の記録がざっくり一まとめになっているとか。中国関係のものは中国関係のものでスクラップ一まとめとか、訪中団の資料は一まとめに全部分類されていました。後からうかがった話では、現宗研の方で中濃先生と親しかった方がダンボールにまとめる作業をされたそうですが、それでもゼロから全てを整理することはできません。やはり、中濃先生が運動をしながら整理をしてこられたおかげで、残された資料もしっかり分類しきれいに整理され、現宗研に保存できていたのだと思います。多くの運動の事務局を兼務されるだけでなく、多くの資料を集め、多くの原稿を執筆し、自著に対する批判も目を通し、保存していらっしゃった中濃先生の一連のお仕事は本当に素晴らしいと思います。

戸田　ありがとうございます。続きまして永岡先生へ、ご感想をいただいております。「高校生のときに読んだ、高橋和巳『邪宗門』に表されている内容が、よく現実的に理解できたことがありがたかったです」。ご感想ということですが、永岡先生、コメントをいただければと思います。

永岡　ありがとうございました。

『邪宗門』、ご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが、小説家の高橋和巳という人が、六五～六六年の『朝日ジャーナル』に連載した長編小説です。これは、二つの大本事件、先ほど紹介した弾圧事件を下敷きにして、それに、天理教や天照皇大神宮教など、他の教団の要素も組み込みながら書かれた小説です。

高橋和巳は割と学生運動などをテーマにした小説を書いていましたし、大本というものが、いわば反体制のシンボルみたいな、そういうような受け止められ方を、六〇年代当時にしていたということがよく分かる作品です。今日お話しした時代と、ほぼ同時期に書かれた大本の話ということになります。

ただ、違っている部分にも注目する必要があります。いろいろありますが、やはり大きいのは、大本を題材に高橋が創作した教団というものは、戦前に二回弾圧を受けて、最後に、進駐軍にもう一回弾圧を受けて壊滅するという結末になっていて、「高橋氏好みの終末願望」（安丸良夫「出口王仁三郎の思想」『日本ナショナリズムの前夜―国家・民衆・宗教』洋泉社、二〇〇七年、一五四頁）などと言われたりします。他方で、大本自体は、今日お話ししたように、戦後も平和運動という形で、ずっと生き続けてきて、今現在も活動をつづけています。そこに両者の決定的な違いがあるといえるでしょう。

ですから、文学的な作品世界というものと、現実の宗教教団というものは、当然ながらギャップがあるわけです。ギャップがあるから悪いというわけではないのですが、その運動のリアルというものと、それから、文学的な表現というものの差というものについては、考えていくと意義深いものがあるのではないかということを、私も『邪宗門』に関しては思っています。

僕も感想みたいなことですけれども。

戸田　ありがとうございます。いただいたご質問は以上でございます。ここからは、フロアから追加のご質問、あるいはご意見などをお受けしたいと思います。なお、コメントをいただける方は挙手をしていただきまして、どちらの先生へのコメントであるかをお示しいただいた上でお話しいただきますよう、お願いいたします。

なお、中濃資料の件がございましたので、それぞれ中濃先生に絡めてご講演をいただきましたが、今回のメインテーマは「戦後日本における宗教者の平和運動」でございます。直接的に中濃先生と関係ないご質問も遠慮なくお上げいただきますように、お願いいたします。いかがでしょうか。

質問1　質問は永岡先生になのですが、東京、上野、池之端の方に大本教というものがあるのですが、それは、今日話が出ておりました大本教と一緒なんでしょうか、どうでしょうか。

永岡　一緒です。大本の東京宣教センターです。同じです。

質問2　はい。

戸田　では、次の方どうぞ。

質問2　戸田上人に、先ほどの質問をもう一回、補充させていただきます。

四十年前に中濃先生の呼び掛けで、近代日蓮教団史教学史を研究しようというので、二か月に一回ほど、谷中の領玄寺に集まって、一年以上、先生を囲んで勉強会をいたしました。その成果が、この『近代日蓮教団の思想家』だったのですが、私も執筆させていただいているのですけれども、その席でいろいろな雑談がありまして、私は中濃先生にいろいろな質問をいたしました。

特に私は、記憶に残っているのが、池上の林昌寺で終戦の翌日に、宗門の戦争責任を取って自殺をされた加藤文輝上人。私たちは「割腹自殺をした」と聞いていますので、「先生、本当ですか」と質問したのです。そしたら、中濃先生は、「死んだと聞いて、すぐ飛んでいって、先生の体を清めて、棺に私が入れたんだ」と。「『何で？　先生、何で？』と言って、棺に入れた」と。「服毒自殺だった」と、そう言いました。「自分は見たけど、腹は切ってない」。

そのときに、加藤文輝上人は当時の皇道仏教と対立していまして、高佐貫長さんの天皇本尊論の皇国運動に対して、

若手のリーダーとして、ずっと対峙していました。高佐貫長やその一門が、終戦後、その責任を取らずに、それぞれ宗門の要職に就いて今日にあると。ところが、加藤文輝上人は早く死んでしまったために、その対立した人たちの声が全部途絶えてしまって、中濃先生は、今日の先生方の発表では、「妹尾義郎との出会いが原点だ」というお話だったのですが、私はそのときの感触で、加藤文輝上人を抱いたそのときが、中濃教篤先生の社会の運動に対する一歩だと思います。つまり、宗門に対する不信、宗門に対する疑惑というようなものが、きっと、そこから始まったのだなと。

私は、その後、何度も聞いたのですが、それ以上のことは、おっしゃってくださらなかったです。どこかに書いたものがあるかと思って、先ほど戸田さんに質問いたしました。戸田さんの話では、「そういうものは、ない」と。ただし、高佐貫長の天皇本尊論については、中濃教篤先生は、あちこちで書いていると思います。ところが、その高佐貫長のお孫さんが現宗研の主任になったために、この問題があまり公に議論されてないと思うのです。

私は、やっぱり中濃教篤先生が最初に天皇本尊論、宗門に疑惑を持ったという、そこからも、資料を見ながらまとめてもらいたいと。現宗研の若手の人たちに、それをお願いしたいということです。以上です。

戸田　貴重な情報とコメントをありがとうございました。ただいまご教示いただいたような面からも、資料を改めて確認して、今後研究をさせていただきたいと思います。ありがとうございます。では、大谷先生からもコメントをいただきます。

大谷　これは、資料がなかったので分からなかったので、もしご存じの方がおられれば、ぜひ、ご教授賜りたいと思うのですが、細井友晋上人の場合は、戦前に名古屋で日蓮宗の青年会運動をやっていて、日蓮主義というか、石原莞

爾の日蓮主義に非常に共感をされていたということがわかっているのですね。

中濃先生の戦前の話というのは、私は読んだことがなくて、資料の中にもないのですね。戦前に中濃先生がどういうことを思っておられたのか、どのような活動をしていたのか。もしご存じの方がおられれば、ぜひ、ご意見賜りたく思います。

戸田　もし、そういったことを何かご存じの方がいたら、ご発言をいただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

突然ということもございまして、なかなか手を挙げにくいところもありますでしょうか。今後もし、そういったことが何かありましたら、ぜひとも、ご教授をいただけると助かります。どうぞよろしくお願いいたします。

引き続きまして、どなたかご質問ご意見等ある方、いらっしゃいますでしょうか。

それでは、突然のご指名で大変恐縮ですが、本日、宗平協から代表の方がお見えになっていらっしゃいますので、何かコメント、あるいはご意見等をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

宗平協参加者　本日は、ありがとうございます。突然の指名で恐縮です。

本日は、セミナーへのお誘いに、まず感謝したいと思います。それと、中濃先生の膨大な資料、それに加えて細井友晋先生の資料まで含めて、それを整理され、様々な角度から中濃先生に焦点を当てていただいた。戦後宗教者平和運動のまさにキーパーソンであるということを、また鮮明にしていただいたということを、心から感謝したいと思います。

私も、中濃先生に、もう五〇年前ぐらいに宗教者平和運動の中で、お会いさせていただきました。七〇年代は、信

教の自由、靖国神社問題を中心に、戦争責任の課題と重なり合いながら親しくさせていただき、ベトナム反戦運動もそうでしたけれども、七〇年代後半から八〇年代にかけては、細井先生が原水爆禁止運動にも深く関わっておられたというよういきさつもあり、七七年度核兵器市民団体の合意というようなところから、世界宗教者核兵器廃絶と軍備全廃の宗教者平和会議開催というような中で、中濃先生、その他が果たされた役割、その事務局の一端を担わせていただきながら、ご一緒させていただきました。

一つは、大谷先生が最後にまとめられた戦争責任問題。そのところと、それに基づくベトナム反戦、反核平和の課題、広島・長崎を抱え、ビキニの被災ということの中で沸き起こった反核平和の運動の盛り上がり、そして、アジア諸国との友好連帯運動との関わりで、中濃先生が果たされたという大きな役割を、本当に改めて感じることができまして、本当に感謝したいと思います。

幾つかのスライドを見ながら、色々な意見もありましたけれども、その点についても、後で、また申し置きさせておいていただければと思います。

とりあえず、急ですけれども感謝いたしたいと思います。ありがとうございます。

戸田　ありがとうございます。先生方、今のお話に対しまして、何かございましたらお願いいたします。

大谷　コメントをどうもありがとうございました。

今ご指摘いただいた中で、最後のアジア諸国との友好連帯に関してなのですが、今回、三人とも、一九七〇年代、八〇年代までの手前で話が終わってしまったので、お話をすることができなかったのですが、戸田上人がまとめてくださった中濃先生の年譜を拝見すると、一九七一年、現宗研所長に就任されて、「七一年一二月にアジア仏教徒平和

会議、ＡＢＣＰの執行委員となり」とあり、モスクワに出張されているのですけれども、このＡＢＣＰ関係の資料も、かなりあるのですね。

それが、今回まだ分析ができていなくて、発表もできなかったのです。

ですから、中濃先生の場合、いえ、中濃先生を含めて、宗教者の平和運動のグローバル化がこの一九七〇年代以降に起こってくるのかなという気がいたします。

戸田　お願いいたします。

宗平協参加者　先ほど質問に出されていましたけれども、宗平協の事務所が転々としまして、一度、池之端の大本の所にも宗平協の事務所があったり、先ほどから何度も名前が出てきていますけれども、壬生先生の華蔵院に事務所があったり、東京山手教会に宗平協の事務所が移転したりというようなことで、宗平協自身の資料も散逸しているという中で、中濃先生が几帳面に和室の所にきれいに整理されて。いつも原稿を依頼すると、三時間後ぐらいに電話がかかってくるのです。そうすると、われわれ、広小路に今は事務所ありますから、もう、「谷中に、領玄寺に原稿を取りに来い」というようなお言葉をいただいて、本当に感謝して、切羽詰まった状況の中でも、さっと文章を仕上げていただいたということも、本当に懐かしい思い出として、感謝したいなと思っています。

ありがとうございます。

戸田　ありがとうございました。

他に、どなたかいらっしゃいますでしょうか。

質問3　はい。

戸田　お願いいたします。

質問3　神奈川三部で立正平和の会に関わっています。

私的なことなのですが、中濃先生のお師匠様と私の父が、やはり師弟関係で、私の父が中濃教正上人の弟子になっているものですから、そんなことで、中濃先生とは非常に個人的な面倒を見ていただいたこともあるので、研究内容とか、今日のこととはずれてしまうのですが、一つ知っておいてもらえたらと思うことがありまして、発言をさせていただきます。

中濃先生は、非常にお酒が好きだったのですね。宗平協の会議とかいろんな会合があって、夜遅く外で飲んでお寺に戻っても、私は住まいが小田原だったので、「遠藤、遅いからうちへ泊まっていけ」と言われて、泊まらせてもらったこともあるのですが、夜八時とか九時になってお寺に帰っても、部屋におかんの用意がしてあるのですね。それで、そのおかんでまた改めて一杯飲みながら、今日あったことを奥様に向かって話されるのですね。それを、奥様はそばで、本当にニコニコとして、穏やかで、「こんな奥さんなら、いいな」と若い頃思ったのですが、本当に包容力を持って中濃先生の話を聞いてくださっていました。

そういう姿を私も見ていましたので、考え方、行動等、本当に素晴らしい方なのですけども、その一面でまた、そうした家庭の姿があったということも、知ってもらうこともいいかなと思って、発言させていただきました。

もう一点、私が感じているのは、そういう厳しさを持った中濃上人ですが、非常に温かみがあるなと思ったのは、私も立正大学に通っている頃ですけども、今、日蓮宗の管長になられた菅野貫首様が近くだったので、中濃上人が、

「菅野さんは北海道から出てきて、大変、今、苦労しているから、何かあれば使ってあげたいんだ」ということで、法事の出座によく菅野上人を、使うと言うと変ですけども、頼んでおられた。私も二、三度、菅野上人と一緒に法事を務めたこともあるのですが。そういう意味で、人を見る目も、ちょっと想像できないような温かい目を持っておられたのだということも知っていただきたいな。その頃の若い菅野上人の姿を思い浮かべながら、発言させていただきました。余計なことですけれども、ありがとうございました。

戸田　貴重なコメント、ありがとうございました。

本日の私の発表ですとか、また大谷先生のご講演の中でもありましたとおり、中濃先生は非常に、いろいろな面をお持ちであったと思われますので、今のようなコメントですとか、いろいろな面の中濃先生のお話をお聞かせいただけるということは、大変ありがたく拝聴しております。ありがとうございました。

それでは、そろそろお時間も参りますので、最後に先生方から、まとめの意味も込めて、もう一度ご発言をいただきまして、質疑応答の時間を閉じたいと思います。それでは永岡先生から、お願いいたします。

永岡　今日は本当に、どうもありがとうございました。

私だけ中濃教篤先生を主題にした発表ではなくて、違った角度から、お話をさせていただいたのですけれども。実際、直接的な接点ではないけれども、戦後の日本という場所の中で、いろんな教団や、個人の宗教者たちが、それぞれの形で、「平和っていうのは、どういうふうなものであり、どういうふうに実現していくべきなのか」ということについて、模索し、試行錯誤しながら、やってきたということの一端は示せたのかな、というような気がしています。

そういった様々な観点からの平和運動研究というのは、本当に、まだまだというか、緒に就いたか就かないかぐら

いの未完成の主題なので、これからも、私自身も含めて、史料の掘り起しと、解釈と、それから、経験者の聞き取りとか、そういう、いろんな方法でやっていくということが、平和運動の実践に対しても重要なことなのではないかなと、改めて、今日、考えさせていただいたという次第です。

どうもありがとうございました。

坂井田　私も、門外漢ではありますけれども、中濃先生の資料をたくさん見せていただいて、そして、今日、また、皆さんのお話を聞かせていただけて、本当に勉強になりました。ありがとうございました。

資料から見ております中濃先生は、何回も申していますように、非常に几帳面で、事務能力の高い、学者肌の方ではないかな、と思っていたのですが、三原所長とかのお話を聞くと、「いや、もう、むしろ活動家で怖い方だった」とも伺いましたし。また、たった今お伺いしたお話は、非常に家庭的で、奥様を大事にされる優しい方で、後輩思いの方だったと伺って、非常に中濃先生の多面的な面を見ることができまして、改めて資料だけ見て研究する危うさというところにも気付かせていただいたということでも、非常に貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

本当に、歴史研究というものは資料が前提でありまして。ですが、資料がないということも、やはり、ある一つの意味があるのですね。これは、以前、戸田さんとも、お話しさせていただいたと思うのですが、あれだけ段ボール三十箱ぐらい資料がありながら、戦前に関する資料が、ないのですね。警察資料の出版したものだけは購入されていてあるのですが、戦前に関する資料がないというのは、私たちの年代にとっては不自然ですが、中濃先生の年代に周囲に戦前のことを語れる人間が多いので自然だったとか、それとも何か別の理由があるのか。今日、フロアの方から貴重なご経験のお話をいただいたということで、また一つ、資料の向こう側を研究するきっかけをいただいたというこ

とに関しても、非常に感謝申し上げます。

本当に、今日は、どうも、勉強させていただいて、ありがとうございました。

大谷　本日は、まことにありがとうございました。

私は、戸田上人や坂井田先生と比べると、月一回ぐらい何とか資料整理に来たいなと思いつつ、来られないときもあったので、頻繁に現宗研に通えたわけではないので。先ほど坂井田先生からお話があった通り、几帳面に整理されたファイルを拝見して、それを打ち込むのは大変だったのですね。ただ、そのファイルを見ると、その当時、例えば「一九六〇年代、六七年のこの時期に、中濃先生はこういうことに興味関心を持っていたんだ」ということが分かって、実は、それが中濃先生個人だけの問題だけではなくて、その中濃教篤という宗教者が興味関心を持っていたことが、おそらく、その時代の宗教者が興味関心を持っていたことなのだろうということが伺えるのですね。それも、やはり、資料があってこそ初めて分かることなので、改めて中濃先生の残された資料のありがたさを痛感しております。

私は、現在の宗教者の平和運動の調査もしているのですが、最近現場になかなか行けてなくて、数年前までは、現場に行くと小野先生が必ずおられて、いろいろとご指導をちょうだいしています。その中で、私が調査に行って、いつもお聞きすることがあります。今日の話の中にも若干出てきたのですが、「宗教者の行う平和運動や社会運動は、信仰とどのように関係があるのか。信仰の発露として、社会運動や平和運動があるのかどうか」ということが、いつも気になります。

言い換えると、宗教者がやる平和運動と、宗教者ではない人が行う平和運動は違うのかどうかということです。私個人は「違うんじゃないか」と思っていて、「やっぱり宗教者の行う平和運動というのは独特の意味づけがあるとか、活動のあり方っていうのがあるんじゃないか」と思って質問をすると、それに関して、「宗教者は、やっぱり独自の

思いでやっているんだ」ということをおっしゃる方もいれば、「そうじゃない。全く関係ない。宗教者であろうが、宗教者じゃなかろうが関係ないんだ。平和運動っていうのはそのこと自体が大事なんだ」という方もおられて、あまり一般化はできないんですね。

ですから、個々それぞれの考え方に基づいて活動が行われているのだけれども、でも、私がお話を伺うと、仏教者の方もいれば、クリスチャンの方もいれば、いろんなお立場の方がいるのだけれども、やはり、それぞれ独自の考えでやられている。

宗教者の平和運動を扱うと、どうしても宗教者の平和運動の持つ政治性みたいなことばかりに関心が行きがちで、私も、そこに興味関心を持ちがちなのだけれども、「そもそも宗教者平和運動の宗教性とは何か」とか、「なぜ、その宗教者が平和運動に取り組むのか、社会活動に取り組むのか」ということについてもう少し深く、今後、研究していきたいと思っています。

その辺を、また皆様に、いろいろとご意見をちょうだいできればと思います。本日は、まことにありがとうございました。

戸田　皆様、ご協力ありがとうございました。以上をもちまして質疑応答の時間を閉じさせていただきます。最後に、講師先生方に盛大な拍手をお願いいたします。先生方、ありがとうございました。